

ISSN 0910-2396

野鳥 —北海道— だより

第 76 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成元年 6月21日



エリマキシギ 1988. 8. 鶴川 撮影者 竹内 強



もくじ

私の探鳥地……………見延 誠……………	2
北海道に舞い降りた迷鳥たち……………山田 良造……………	3
聞きなしの民話(五)夜鳴く鳥……………武沢 和義……………	4
平成元年度総会報告……………	6
探鳥会報告……………	8
探鳥会案内……………	12
鳥民だより……………	12

私の探鳥地 ⑪

知内川下流

見延 誠 一

前任校の千軒小学校の頃、鳥に魅せられ授業の始まる前などにもよく通った、知内川を紹介します。

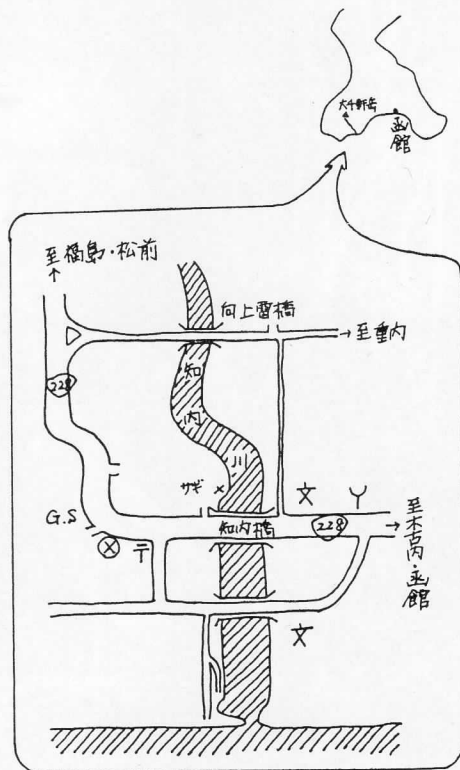
函館から国道228号線を西へ車で1時間程行き、知内町の消防署を右手に通り過ぎたところに、知内橋があります。この橋から知内川上流を眺めると左手の川岸にコサギやチュウサギなどのサギがエサをついばんだり、飾り羽を見せびらかしている風景に出会います。(4月下旬～6月上旬、9月)また、9月上旬頃には、ミサゴが上空を優雅に飛翔し豪快なダイビングをして見せてくれます。

河口付近にはもう一つ橋があり、そこから堤防まで続く小道があります。ここでは、コヨシキリ、ホオゾロ、アオジ、オオジュリン等草原の鳥や、春秋の渡りの時期にはツグミ、カシラダカ、冬にはベニヒワ等が見られ、川には、カイツブリ、アカエリカイツブリ、カモ類、カモメ類、ハマシギ等のシギチも見られます。また、それらを狙ってかチョウゲンボウ等を見かけることもあります。この小道の下に用水路があり、カワセミがエサをとりにきます。62年11月30日にはタゲリがミューと鳴いて飛んで来てエサをついばんでいました。

この堤防から、冬、津軽海峡を臨むとアビ、ミミカイツブリ、海ガモ類、ウミアイサ、コクガンも見られます。

先程の知内川から上流へ行ったところに向上雷橋があります。この橋から川を眺めると、きまってコチドリがびっくりして飛んで行きます。ハクセキレイ、セグロセキレイ、キセキレイも同じところに見られ、追いかけても見られます。トウネン、アオアシシギ等も少数ですが見られ、他に、カワガラス、アオサギ、またホオアカ、モズ、オオヨシキリ、オオジシギ等も見られます。

ここからさらに上流の千軒まで行くと森林の鳥が楽しめますが、それは千軒小中学校の子ども達の観察報告を楽しみにして今回はこの辺で終わります。時間がありましたら、大千軒岳の登山もお試してください。帰りには、湯の里の温泉で登山の疲れをいやしてはどうですか。



〒041-11 亀田郡七飯町本町426

北海道に舞い降りた迷鳥たち

山田良造

渡り鳥たちは繁殖地と越冬地を年1回往復しているが、四季に合せ多くの鳥は渡るコース、休息地が定まっている。ところが、何らかの原因で仲間からはぐれ、渡るコースを大きく外れ、日本に舞い降りた迷鳥たちがいる。特に迷鳥たちが記録される所として、長崎県対島、石川県舩

倉島、北海道天売島が知られているが、舩倉島～天売島には渡りのコースがあるのではないかと言う説もある。

今回は北海道で記録された迷鳥たち三例を、地域で熱心に野鳥観察している寺沢孝毅氏と星子廉彰氏の記録を紹介します。

1. ニシコクマガラス(カラス科)

仲間からはぐれた1羽のニシコクマガラスが、1986年4月22日から5月8日まで、天売島天売港で休息した。この鳥を観察した寺沢孝毅氏の記録が、野鳥1988年4月号(500号記念号)で紹介された。

ニシコクマガラスは、ハトぐらいの大きさの小形のカラスで、コクマガラスのヨーロッパ系の種で、虹彩の色は白で、アジア系の褐色と異なっている。学者によってはコクマガラスの一亜種として扱っている。

コクマガラスは、九州などに多く渡来するミヤマカラスの群れにいる例が多く、北海道でも1978年札幌、函館、大樹で記録があるが、ニシコクマガラスの記録は日本で初の迷鳥で



ニシコクマガラス 1986. 5. 13 天売 寺沢孝毅 撮影

2. ヒメイソヒヨ(ヒタキ科)

1986年5月26日午後2時30分、天売島の雑木林で寺沢孝毅氏が、コバルト色に輝く美しいヒメイソヒヨ♂を観察した。この鳥は翌日の5月27日まで島にとどまり飛立った。

ヒメイソヒヨは全長18.5cmとこの属の中では小さい鳥で、♂は頭がコバルトブルー、背、翼、尾は黒色、顔から胸は赤褐色である。アムール地方、ウスリー地方、トランスバイカリア地方、中国東北地区、朝鮮半島北部で繁殖し、冬は中国南部、インドシナ半島などに渡る。日本には1969年5月、秋田県秋田市で♀1羽の記録があ



ヒメイソヒヨ 1986. 5. 26 天売 寺沢孝毅 撮影

るが、♂の記録は日本初の迷鳥である。

3. ヒメシジュウカラガン(ガンカモ科)



ヒメシジュウカラガン 1989. 4. 29 美唄宮島沼 山田良造 撮影

1989年は例年より雪融けが早く、3月29日美唄市宮島沼の氷が融けると、北帰行のマガン17,000羽が渡来し、このマガンの大群の中に、ヒメシジュウガン1羽が入っているのを星子廉彰氏が観察した。星子氏は1981年にもヒメシジュウカラガンらしき小形のガンを見ており、今回は写真とビデオで撮影し、日本野鳥の会記録委員会に記録を送り、ヒメシジュウカラガンである回答を得たものである。

カナダガンには12亜種があり、それぞれの亜種は色彩はよく似ているが、大きさはかなり違っていて、最小の亜種

がヒメシジュウカラガンである。この鳥は頭から頸が黒くて頬に白い斑があり、体は灰褐色、首の下の方に白い線の輪をもつものとなないものがあり、今回渡来したヒメシジュウカラガンには細い白線がある。

アラスカ北西端で繁殖し、日本には伊豆沼と片野鴨池に、ヒメシジュウカラガンの可能性が強い、小形シジュウカラガンが渡来した記録がある。

注……資料不足から間違いがありましたらお詫びします。

日本産鳥類図鑑(東海大学出版会)、鳥630図鑑(日本鳥類保護連盟)、日本の野鳥(山と溪谷社)、野鳥1988年4月号(日本野鳥の会)参照。

〒003 札幌市白石区栄通16丁目4-13

聞きなしの民話

(五) 夜鳴く鳥

武 沢 和 義

宮沢賢治の短編童話の中で最も親しまれている作品として「よだかの星」がある。この作品の主人公は当然のこととしてヨタカと考えられており、これに異論を唱えた評論は無いと思う。それよりも、作品の前半に描写されている「よだか」が、ヨタカの生態を童話としては、めずらしく的確に表現しているという評価の方が高い。しかし、作者の原稿の表紙には最初「よだか」と書かれていたのが、「ぶとしぎ」と変更されており、更に、自作品の題名列挙メモには「ぶとしぎ」となっていることが知られている。それが「よだかの星」と呼ばれるのはヨタカの話と信じられていることと、草稿の第一頁目に書かれた題名が「よだかの星」になっているからである。鳥に興味を持っている賢治ファンの一人としては、本当の題名が何であるか興味深い問題である。

宮沢賢治は推敲魔として知られており、一つの作品に

何度も手を加え、場合によっては表現だけではなく、ストーリーや主人公さえすっかり書き換えている作品もある。ここでは、文学的な立場から、いずれの題名が正しいのかを論じるつもりはないので結論だけ述べると、作者が主人公を「よだか」から「ぶとしぎ」あるいは「ぼとしぎ」に替えようとしていたことは間違い無いと思う。後者の名を持つ鳥はアオシギ、オオジシギ、ヤマシギ等で、干潟よりも草原や森林で見られるシギ類が多いようであるが、詩集「春と修羅」を参考にすれば、オオジシギを指している可能性が強いと思われる。

ところで、ヨタカには「きゅうりきぎみ」とか「嫁起こし」という面白い名前がある。ヨタカのキョんキョんキョんというあの単調な鳴き声がキュウリをきぎむ時の庖丁の音とリズムがよく似ているのでこの名がついた。今でも、嫁と姑の関係にはいろいろと難しい問題がある

といわれているが、民話が語られていた昔の社会では、もっと難しかったと考えられる。農家の嫁が、夜中にふと目を覚ますと、キュウリをきざむような音がどこからともなく聞こえて来る、嫁が慌わてて台所に行ってみるとヨタカの鳴き声が聞こえるだけであったという話などが伝えられている。

一番働き者で夫婦仲のよい鳥は何かと聞けば、皆さんはどう答えるだろうか。夫婦仲がよいというだけなら、まずオンドリを思い浮かべるかも知れないが、その前に、働き者と付くと即答出来ない人が多いのではないかと思う。民話の世界では間違いなくフクロウである。「ぼろすけ奉公、また奉公。七年奉公、また奉公」と働き続け、夫が「糊付けほうせえ」呼びかければ、妻が「糊付けほうそう」と答えると言う。後者の聞きなしは雄が尻上りに鳴くのにに対して、雌が尻下がりに鳴くのに対応しているという。

これ等の聞きなしには変化が多いので、その一部をまず紹介しよう。ぼろすけは「ごろすけ」と聞いてよく五郎助の字が当てられる。もちろん「五郎助奉公」と聞きなされる場合が多いが、東海地方では「ホーホ、五郎助どうした、酒でも飲んだか」と聞かえると言う。こうなると働き者のイメージはくずれてくる。更に、仙台での「のらすけホーホ」になると、完全に怠け者になってしまう。「ノリツケホーセ」の方には天気予報用の鳴き方もあって、「フクロウ紺屋」という有名な民話がある。フクロウは昔、紺屋であって、あるときトビの羽を染めたのがとても美しく仕上がった。すると、もともと白い鳥であったカラスが自分もあの様に美しく染めて欲しいとたのんだ。ところがフクロウは間違えて真っ黒に染めてしまったので、カラスはすっかり怒ってフクロウを見るとつくつくようになった。それでフクロウはカラスのいない夜にだけ出てくるようになったが、もともと紺屋なものだから天気がよくわかり、「ノリツケホセ、ノリツケホセ、ホホン」と鳴くと天気になり、「トリコメ、トリコメ」と鳴くと雨が降る、というのが話のあらすじである。いわゆる南海地方では「フルウツクの子、糊をすり置き、あすは日より」と鳴くという。フルウツクというのはフクロウの異名で、ツクというのがそもそもフクロウの古い名前である。異名や聞きなしの多さは、その鳥が昔から、いかに人に親しまれてきたかを示すパラメーターと考えることが出来、フクロウにはそれがすごく多いので、いまでは考えられないほどにあたりまえの鳥だったと思われる。しかし「クオックオー鳥」、「クモクモ鳥」、「ヨントク鳥」という異名は意味がよくわからないが、いずれも民話ではヨシとトクという兄弟の名が出てくるので、それなりの意味があったのだと思う。

フクロウの仲間では、ついで有名なのが声のブッポウ

ソウと呼ばれるコノハヅクである。コノハヅクがブッポソウと別の鳥であることが判ったのは昭和十年のことであるが、鳴き声そのものは昔から仏法僧あるいは三宝鳥として取り扱われてきた。上田秋成の「雨月物語」高野山で野宿した僧がコノハヅクの声聞いて「あなめずらし。あの鳴声こそ仏法僧というならめ。かねて此山に栖つると聞きかど、まさに其音を聞きといふ人もなきに、こよひの宿りまことに滅罪生」と感激する場面が出てくる。私たちが偶然にめずらしい鳥を見たときの感激と相通ずるものがあるのではないだろうか。これとよく似た話が菅江眞澄遊覧記の内の「えみしのさへき」に北海道での話としてでてくる。更に同書には、上ノ国で昼間でもコノハヅクが鳴いているので、荒熊がでるから大勢でなければこの道は行けないというので、鉦を打ちながら行ったという話も述べられている。

次に、少し変わった話を紹介したい。柳田国男の「川童の渡り」という論文に河童の鳴き声というのが出てくる。一般に妖怪や化物というのは昔の神様の零落した姿であり、河童は水神のなれのはてという事になっている。水神は農耕民族である日本人にとっては、田の神に他ならない。この神様は、夏の間は田にいるけれども、冬になると山に入って山の神になるとされており、これ等の神がそれぞれ落ちぶれたのが、河童と山童(やまわろ)という妖怪である。河童が山童になるために山に入るのが「川童の渡り」であり、真夜中にヒョンヒョンと鳴きながら移動すると言う。柳田国男は、鳥の鳴き声に詳しい人に聞いたらムナグロの声であると教えられたと述べている。しかし、ムナグロの声はこれとは全く異なっており、現在ではトラツグミと考えられている。昔からいわれているトラツグミの鳴き声は基本的には、ヒョーン、スーンであり、地方によっては、それがそのまま呼び名になっている。面白いことに各地にひょうす(兵主)神社があり、特に九州では、それが河童に縁が深いことが知られている。

ムナグロはチドリ的一种であるが、日本の古典文字ではシギ・チドリは一般にチドリとしてまとめられており、これ等も夜鳴く鳥として知られている。例えば万葉集の柿本人麿の歌にある「淡海のうみ夕浪千鳥汝が鳴けば心もしぬいにしへ思ほゆ」がある。この千鳥が何を指すのかよく判らないが、アオアシシギという説がある。前に紹介したムナグロを歌ったと想像されているのに、新古今集の「白なみに羽うちかはし浜千鳥かなしきものは夜の一声」という源重之の作品がある。浜千鳥といえば、まず思い浮かべるのは鹿島鳴秋の童謡「青い月夜の浜辺には、親を探して鳴く鳥が」で始まる「浜千鳥」ではないだろうか。青い月と言うのは、現在ではほとんど死語になっているが、厳寒期の満月を指す。

〒064 札幌市中央区南4条西26丁目

平成元年度總會報告

日 時：平成元年4月15日(土)午後2時～4時

場 所：札幌市民会館

柳沢会長のあいさつのあと、議長に小堀焯治氏を選出し審議が行われ、原案どおり可決された。

<議事>

1 昭和63年度事業報告

(1) 総務

ア 新年懇談会の開催(元.1.14、札幌市婦人文化センター)

イ 野鳥写真展の開催

・たくぎん自動サービスフロア(63.4.20～5.2)

・三菱信託銀行札幌支店(63.5.11～5.22)

ウ 「私たちの探鳥会—探鳥会17年の記録」の出版

エ 定例幹事会の開催(毎月1回)

オ 野鳥だよりの発送(72～75号)

カ 傷害保険の更新

(2) 広報

野鳥だよりの発行(72～75号)

(3) 探鳥

探鳥会の開催(17回、605名)

2 昭和63年度会計報告

3 昭和63年度会計監査報告

大坊監事から適正に執行されている旨の報告があった。

4 平成元年度事業計画

(1) 総務

ア 新年懇談会の開催(1月)

イ 野鳥写真展の開催

・たくぎん自動サービスフロア(63.4.27～5.19)

・三菱信託銀行札幌支店(63.5.22～6.2)

ウ 定例幹事会の開催(毎月1回)

エ 野鳥だよりの発送(76～79号)

オ 傷害保険の更新

カ 会員名簿の作成

キ チェックリストの作成

(2) 広報

野鳥だよりの発行(76～79号)

(3) 探鳥

探鳥会の開催(17回)

昭和63年度決算書

(収入の部)

区分	決算額(A)	予算額(B)	増減 (A-B)	摘要
繰越金	180,127	180,127	0	
個人会費	429,000	555,000	△ 126,000	245人
団体会費	4,500	18,000	△ 13,500	1団体
寄付金	65,200	5,000	60,200	大野氏他
参加費	33,000	35,000	△ 2,000	
売上金	375,120	265,000	110,120	野鳥だより、 私たちの探鳥会
雑収入	29,296	1,873	27,423	写真展補助金他
計	1,116,243	1,060,000	56,243	
会費返受分	58,500	0	58,500	
合計	1,174,743	1,060,000	114,743	

(支出の部)

区分	決算額(A)	予算額(B)	増減 (A-B)	摘要
印刷費	416,050	380,000	36,050	野鳥だより、 封筒他
通信費	189,950	260,000	△ 70,050	だより発送費他
会議費	114,478	120,000	△ 5,522	幹事会・総会等
消耗品費	21,089	35,000	△ 13,911	コピー、 事務用品
賃金	0	20,000	△ 20,000	
報償費	140,610	150,000	△ 9,390	探鳥会手当、 事務所謝礼
雑費	64,050	95,000	△ 30,950	傷害保険、 写真展
合計	946,227	1,060,000	△ 113,773	

(収入) (支出) (残高)

1,174,743 - 946,227 = 228,516

(会費返受分 58,500)
(繰越金 170,016)

5 平成元年度予算

6 その他

本会の名称変更については、会員の意見を聞きながら引き続き検討する。

7 役員選出

早瀬広司氏、堀内進氏が退任され、新たに山田良造氏、泉勝統氏、鎌田玲子氏が選出された。

なお、総会後の幹事会において、代表幹事と各幹事の担当を定めた。

会 長 柳沢信雄

副 会 長 小堀煌治

監 事 野村梧郎、大坊幸七

代表幹事 白澤昌彦

会計幹事 道川富美子

総務幹事 ○渡辺紀久雄、柳沢千代子、大町欽子、清水朋子、村野紀雄、井上公雄、泉勝統

探鳥幹事 ○井上公雄、大野信明、戸津高保、富川徹、山田良造、中野高明、渡辺俊夫

広報幹事 ○泉勝統、霜村耕一、小堀煌治、竹内強、武沢和義、鎌田玲子

(○印は各担当代表者)



平成元年度予算書

(収入の部)

項 目	前年度 予算額	予算額	摘 要
繰越金	180,127	170,016	
個人会費	555,000	540,000	1,500円×360人
団体会費	18,000	18,000	4,500円×4団体
寄付金	5,000	10,000	
参加費	35,000	35,000	新年懇談会
売上金	265,000	320,000	野鳥だより、 私たちの探鳥会他
雑収入	1,873	6,984	利息他
合 計	1,060,000	1,100,000	

(支出の部)

項 目	前年度 予算額	予算額	摘 要
印刷費	380,000	470,000	野鳥だより、 チェックリスト、名簿
通信費	260,000	240,000	野鳥だより発送費他
会議費	120,000	120,000	総会、幹事会他
消耗品費	35,000	23,000	コピー、事務用品
賃 金	20,000	15,000	野鳥だより発送、運搬
報償費	150,000	160,000	探鳥会手当、 事務所謝礼他
雑 費	95,000	72,000	傷害保険、写真展他
合 計	1,060,000	1,100,000	

会 員 数

区 分	昭和62.4.1	昭和63.4.1	平成元.4.1
個人会員数	401	413	433
団体会員数	5	4	4



円山公園探鳥会

いつもより春のおとずれが早く感じられる3月のはじめ、円山公園での探鳥会が行なわれた。朝から、お天気にも恵まれ、ジャケットに双眼鏡だけという軽装で参加。

円山公園の入口に足をふみ入れるなり、ヒヨドリやカラス、スズメ等のにぎやかな歓迎を受ける。あたたかい陽ざしの中、探鳥会は出発、10メートルも歩かぬ中に、ベニヒワが、可れんな姿で私達を迎えてくれる。「ようこそいらっしゃいました、私達の姿を心ゆくまで見て下さい」と、云わんばかりに、大きな木の枝の間を、いたりきたり。細い枝にぶらさがって実をついている様子は、まるで、サーカスの曲芸師の様。頭と胸の紅色がとともきれい。

円山公園で、こんなにゆっくりと、ベニヒワを観察出来るのは、めずらしいとの事。

アカゲラやコゲラ等のカラ類と出会いながら神宮の方へ足をむける。エサ台の所で、シメやアトリを確認、相変わらずヒヨドリやカラスが大きな声でおしゃべりをしている。(この場所で、ドブネズミがエサを運ぶさまを見る事が出来る…ドブネズミウォッチング?)

1. 3. 5 大西典子

神宮の横を通って、動物園の方へ。ふと、空を見上げると、マガモが3~4羽空を飛んでいく。(動物園の池から空中飛行に出たのかも)

動物園の沢の方で、いつもは見られるというミソサザイやカワガラスを待つが、今日は見る事ができず、ユーターン、88ヶ所の入口で解散。

お昼までの短い時間での探鳥会だったが、ベニヒワとの出会いに心を満たされながら家路についた。

〒064 札幌市中央区南11条西17丁目4-2

〔記録された鳥〕マガモ、トビ、アカゲラ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、アトリ、カワラヒワ、ベニヒワ、シメ、スズメ、カケス、ハシボンガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上18種

〔参加者〕田中礼子、杉田範男、鎌田玲子、大西典子、横越武雄、柳沢信雄、霜村耕介、泉勝統、高橋、佐々木友子、難波茂雄、榊川保・弘子、新田キノ、丸山薫・かおり、香川稔、佐々木武巳、大野信明、青江正、堀内進、富川徹・明美・優、竹内強、山田甚一・れい子、戸津高保・以知子、井上公雄 以上30名

〔担当幹事〕堀内 進、大野信明

ウトナイ湖

昨日の雪も上がり今朝は暖い良い天気。8時5分大谷地より千歳空港行のバスに乗る。華の札チオン族の私は、探鳥会の弁当は朝、セブンイレブンで買うものと決めていた。が今日は違う。空港で北海道特産品のイッパイ詰った“This is the symbol of HOKKAIDO.”の弁当を買う。我れながらグッドアイデアである。今日はなにか良い事がおこるかも。

ウトナイ湖畔では観光客のエサを求めて3~4羽のコブハクチョウが陸に上り人のあとを追いかけている。まるでアヒルだ。我々バードウォッチャーは誰れも見向きもしない。ナゼダロー。遠い沖合に1-2羽しかいなく、プロミナでもなかなか探せない貴重な鳥ではないためののか。それとも彼らの遠い祖先が今から約100年前ヨーロッパより輸入された飼鳥だったためののか。今では湖面が凍結する冬。彼らの大半は茨城県で越冬すると云われている。立派な野鳥だと思うのだが。バードウォッチャー

1. 3. 26 永島良郎

は自然豊かな地方都市よりコンクリートの大都会に多いと云う。ナゼダロー。

ウトナイ湖サンクチュアリのシンボルバード・アオサギが数十羽飛ぶ。優雅な舞だ。朝日を受けて灰色の雨おおい白く、黒い風切りはより黒く——コウノトリのような——美しいコントラストだ。

沖合に威風堂々としたオオワンがいる。その回りをカラスが2羽飛び回る。時々彼はカラスの方へ首を回す。私にはカラスにからかわれている裸の王様のように見えた。

湖面にカモメSPが1羽。タダカモメだ。札幌に来て約半年。教こそ少いが何度かタダカモメを見た。江ノ島(神奈川県藤沢市)ではこの4年間で1度も見られなかった。

ネイチャーセンターでの昼食後、戸津幹事より感想文の原稿用紙を手渡される。今日は良い事がおこらなかつ

た。

解散後、バス停(ユースホテル入口)までの林道で鮮やかな黄緑色のマヒワ2羽に会う。ヤッパシ楽しい半日だった。

〒004 札幌市白石区厚別南1丁目9-5

1113藤井ビル ひばりが丘

〔記録された鳥〕アオサギ、ヒシクイ、オオハクチョウ、マガモ、カルガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、トビ、オジロワシ、オオワシ、ツルシギ、カモメ、ハクセキレイ、シ

ジュウカラ、スズメ、ハシボソガラス、コブハクチョウ
以上21種

〔参加者〕丸山薫・かおり、宇井晴穂、豊口肇・美代子、戸津高保・以知子、西川喜久世、綿谷千冬、田中金作・礼子、泉勝統、渡辺紀久雄、新田キノ、榊川保・弘子、永島良郎、佐藤勇、白澤昌彦・光明・真紀子、井上公雄
以上22名

〔担当幹事〕戸津高保、渡辺紀久雄

野 幌

探鳥会というか自然観察には以前から興味を持っていましたが、双眼鏡がなく今まで参加した探鳥会では遠くの木梢の小さな灰色っぽい鳥(?)のようなものを目を細めて見る…といった具合でもっぱら聴鳥会を楽しんでいました。

双眼鏡を手に入れた今年はぜひ探鳥会に参加したいと思っていました。ラジオの案内によると4月16日は、集合AM9(今までのAM5!!)と遅いのですが、土曜の天気予報ではあいにくの雨模様です。同伴の友人を見つけられなかった私は悪天候でめげそうだな…と思いました。

当日の朝は予想よりずっと良いお天気で少し肌寒い風も気になりません。大沢口の駐車場で車をとめ、それらしい探鳥会ルックの団体に近づいても知らない人ばかりで特に受付もない様子で心細くオロオロしていました。

名札を受け取り説明をきいて出発。これは…と思うベテランらしい鳥の絵のついたバッグを背負った人や大きな望遠鏡のようなものを肩にかついだ人のそばをチョロチョロしているとコース途中でヤマゲラとその巣穴を発見し、その場で15分くらい観察しました。モノトーンなセーターを着たアカゲラに比べるとずっと中間色でドラミングの音がしないと幹の色合いに溶けて見つけることができません。街中で見るカラスやハトより可愛いなあ…。またヒヨドリが柳(?)の花をパクパク食べるのもじっくり観察しました。池では私はオシドリを見ることができませんでしたが、カイツブリの潜水するところや、つがいで鳴く特徴ある声も初めて観察しました。

私は30年以上札幌に住んでいますが、この野幌の原始林にクマガラがいることを初めて知りました。昨年、然別湖で偶然シマフクロウを間近かで見たので、今年は野幌でクマガラを見れるといいなあ…と次回に希望を持って今回の探鳥会を終えました。

最後に、私は「自然」が大好きです。都会の中で生活し

1. 4. 16 小 田 由 紀 子

ている私を含めた人間と鳥や動物やヒグマや森や川や魚達とうまくコミュニケーションがとれて共存し合えるように人間の領域、自然の領域、ルールを守ってこれからもどんどん自然と接触したいと思います。

以後ネームプレートの始めに「初心者」と書いてあったらぜひ声をかけて下さいね。

〒065 札幌市東区北22条東1丁目15

〔記録された鳥〕オシドリ、マガモ、トビ、ノスリ、オオジシギ、キジバト、ヤマゲラ、アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラ、ヒヨドリ、モズ、ウグイス、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、マヒワ、シメ、ニューナイスズメ、ハシブトガラス、カイツブリ 以上29種

〔参加者〕西川喜久世、東山美明、杉田範男、小林美智子、中村国夫・美智子、高橋郁子、富川徹、富田寿一、大町欽子、猿子正彦・隆行・隼人、西村利男、森田新一郎、小堀煌治、泉勝統、国島達夫、山田良造、豊口肇・美代子、佐々木恵、新田キノ、今野弘、荒武志、佐々木友子、野坂英三、井上公雄、天野昭二・玲子、森雅春・幸子・慎一郎・貴裕・菜穂美、柳沢信雄・千代子、竹内強、浪田良三、高橋ひろみ、榊川保・弘子、佐藤勇、三浦美重子、佐々木武巳、白川一行・美知子・大地・梓・愛、大西典子・尉仁、長山義雄、香川稔、霜村耕介、小田由紀子、佐々木文人、小馬谷秀吉・陽子、根岸工、松井昌

〔担当幹事〕富川徹、山田良造

探鳥会に参加して(野幌森林公園)

野鳥との出会いは、8%撮影に擬っていた青森在職中家の近くの沼に来た水鳥(バン、キンクロハジロ、ホシハジロ……)を撮影してからです。

その後8年前に札幌に転勤となり、家の庭に給餌台を作り庭に来る鳥を楽しみにしながら、又苫小牧北大演習林、ウトナイ湖、釧路のタンチョウと探鳥を楽しんでいましたが、鳥の名前、鳴き声も解らず、是非どこかの鳥の会にと思い探していた折、鶴川の探鳥会(62年8月)を新聞で知り参加し、早速入会させていただきました。何時も楽しい探鳥会に参加させていただき感謝しています。

探鳥会の前日は何時もそわそわ……。

今回も前日は雨、明日の天気が気掛かりでしたが前日の天気とうって変わり暑くもなし寒くもなしの探鳥会となりました。

出発して直ぐウソの歌声に歓迎され幸先の良いスタートです。道端の小川のサンショウウオの卵、エゾエンゴサク、ザゼンソウ、ニリンソウを観察しながらの探鳥。

大沢の池では、今年もオンドリやカイツブリを見る事が出来ましたが、何時もながら出たりもぐったりを繰り返えずカイツブリを見つけるのが大変でした。

大沢園地で昼食をとり、昨年残念ながら写真を撮る事が出来なかったカワセミの営巣した崖を、今年は是非と

1. 4. 23 志田博明

も成功出来る事を念じながら大沢園地を出発、スタート地点へ、鳥合せでは見る事が出来なかった鳥もありましたが、楽しい探鳥会の日でした。

今後共よろしくご指導をお願い致します。

〒006 札幌市西区手稲星置3条7丁目6-5

〔記録された鳥〕アオサギ、オシドリ、トビ、オオジギ、キジバト、ヤマゲラ、アカゲラ、コゲラ、ヒヨドリ、トラツグミ、クロツグミ、ツグミ、ウグイス、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、カワラヒワ、マヒワ、ベニマシコ、ウソ、シメ、ニュウナイスズメ、ハシブトガラス、カイツブリ 以上31種

〔参加者〕豊口肇・美代子、母坪宏行、高橋典彦、道川弘・富美子、志田博明・政子、宮田久、泉勝統、福岡研也・正樹、佐々木友子、戸津高保・以知子、高尾満、佐々木和枝、犬飼弘、岡田幹夫、新田キノ、白澤昌彦・関広司、青江正、菊池坦、川守田順吉、渡辺勘治、三浦美重子、柳沢信雄・千代子、佐藤勇、佐々木武巳、伊藤栄三・芳子、木内泰夫・道子、今野弘、竹内強、高橋洋、田中金作・礼子、野坂英三、井上公雄 以上42名

〔担当幹事〕戸津高保、井上公雄

1年生の記(野幌森林公園) 1. 5. 7 宮田久

“ホラ聴こえるでしょう。”と隣りを歩いている野口さんがいう。だがボクには聴えない。5月7日・野幌でも井上さんが“聴こえる聴こえる。”というが、昔、中耳炎をやったせい、やっぱりだめだ。かくてヤブサメを聴くのはあきらめた。目のほうはもっとだめだ。

持疾のブドウ膜炎のせいで視力は悪くなっても良くはない。探鳥会に出るなどは、いささか分に過ぎたふるまいで、ボクにとっては高嶺の花みたいなものだが、それでもけっこう楽しませてもらっている。

昔、30年近くも前、明け方、家の西の彼方からキョロン キョロンと澄んだ声で歌う鳥がいた。今はこれがアカハラと知るに至るが、これが野鳥はすてきだなァと思った初めである。

話は違うが図鑑で、鳴きの項を読んでもさっぱり分らない。およそ実物の鳴きとはかけ離れたイメージである。アクセントも音の高低もないからだ。それで、ボクは声を聴くと、できるだけ音譜というより略譜でフィールド

ノートに記すことにしてきた。

いつだったか、井上さんがそのオタマジャクシを見て、妙なことをやっているなという顔をした。

少しばかり淋しい思いをするのは鳥合せのときだ。

例えば5月7日・野幌では40種近くが挙げられたが、ボクが見たり聴いたりできたのは10種にもならない。それでもオオルリも見た。パッチリとキンクロハジロも見た。パッチリといったが実は戸津さんが、遅れてきたボクにプロミナーをセットして下さった。とにかく皆さん親切で、積極的にプロミナーをのぞかせてくれる。

イカルの声は早く覚えた。時おり1人で野幌に行くがイカルを聴くのが楽しみだ。62年の千歳川1泊探鳥でアカショウビンを聴いた。楽器でいえばコントラバスか。終りが低く細く消えてゆくあたり、なんとも絶妙で忘れられない。ヤマセミの姿もみごとだった。

60年に入会、年齢だけは70を少し過ぎたが、いつまでたっても1年生。これからも皆さんの足手まといになる

つもりでいる。

〒004 札幌市白石区厚別中央1条2丁目3-4

〔記録された鳥〕アオサギ、オンドリ、コガモ、キンクロハジロ、トビ、キジバト、ツツドリ、ヤマゲラ、クマガラ、アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラ、ツバメ、ヒヨドリ、ミソサザイ、ルリビタキ、トウツグミ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キクイタダキ、キビタキ、オオルリ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、イカル、ニュウナイスズメ、カケス、ハシブトガラス、カイツブ

リ 以上40種

〔参加者〕森田新一郎、泉勝統、霜村耕介、柳沢信雄・千代子、野坂英三、榊川保・弘子、宮田久・安希子、横田通典・キネ、成澤里美、谷口登志、香川稔、鈴木克司、新田キノ、鎌田玲子、佐々木和枝、宇井晴穂・清華、竹内強、大西典子、逸見康夫、西論・早百合、渡辺勘治、松井昌、佐々木友子、千葉広、今泉秀吉、高橋洋、犬飼弘、山田良造、戸津高保・以知子、佐藤勇、野口正男、今野弘、佐々木武巳、井上公雄 以上41名

〔担当幹事〕戸津高保、井上公雄

野鳥と私(千歳)

1. 5. 13~14

遠藤幸子

私と野鳥の出会いは、小学生のころ、春ヒバリのさえずりから始まって初夏を告げるカッコウ、キジバトの声、夏にはエゾセンニュウ超スピード空中降下しながらゴウゴウと鳥とは思えぬ音を出しているオオジシギの大きえずり、よく姿を見かけたのはマガモの親子、石狩浜でウミネコ、マガモのいる川で背中がブルーでお腹が白い美しい鳥、今考えてみるとオオルリだと思う。

その後野鳥とは無縁になってしまった。そして何十年振りであつた野鳥とのふれ合いが戻ってきた。ある日友人とレストランで食事中ハムの話になり私がハムの脂身が食べれないと言うと、その脂身を網に入れてつるして置くと野鳥が食べに来ると教えてくれた。さっそく翌日実行にうつした。ついでにリンゴも12月の末だったので2~3日でヒヨドリ、ツグミが様子を見にやってきた。初めは同じ鳥のメスとオスだと思っていたが図鑑で調べて別の鳥だと知った。

そして間もなくリンゴを食べ始めた。1月末ころ予告もなく、ある日突然小さい鳥が忙しそうに脂身をつついていっている。シジュウカラだ。何日かたってふと脂身の方を見ると私だっているよと言わんばかりに脂身を食べているアカゲラを見た。まるでぬいぐるみのようなかわいい鳥が目の前にしかも私のささやかなプレゼントを受けとってくれている。

あの時の感激は今でも忘れる事が出来ない。調子にのって次はヒマワリをおいてみた。どの鳥が食べているのか夕方には、からっぽになっていた。シジュウカラの仕業だった。またある日外出から帰ってみるとヒマワリはカラだけが残っていた。これはアトリとわかった。それからシメが餌台の上で腕白振りを発揮している姿を見るようになった。

もうこのころになるとすっかり野鳥のトリコになっていた3月中旬、ツッパリのお兄さんと言うか、悪魔の使

者のような鳥がリンゴをついばんでいるキレンジャクだ1週間くらいいたと思う。

4月に入ったら餌台は急に淋しくなった。でも又冬のおとずれとともにかわいい姿を見せてくれると楽しみに待つようになった。

そして9年目が過ぎたころ、この野鳥たちのあいらしい姿をモデルに写真を撮りたくなってきた。

そして3年余り今では主人と2人で10数キロの機材を背負って九州から奄美諸島、八重山諸島までも出かけて行く。機材が肩にずっしりとくいこむが、めざす鳥の姿を見たときたんに重さはいっぺんにふき飛んでしまう。

今回は新聞の案内で野鳥愛護会の写真展を知り、さっそく拝見させていただきその場で入会をきめました。餌台に来る鳥くらいしかわからないので、これからいろいろ教えていただきたいと思っています。そして探鳥旅行などもあったら、ぜひ参加してみたいと思います。

〒066 千歳市若草町2丁目18-5

〔記録された鳥〕マガモ、カルガモ、トビ、ノスリ、キジ、オオジシギ、キジバト、ジュウイチ、ツツドリ、アオバズク、カワセミ、ヤマゲラ、アカゲラ、コゲラ、ツバメ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、カワガラス、コルリ、ルリビタキ、トラツグミ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、シメ、ニュウナイスズメ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上50種

〔参加者〕宗澤美佐子、佐々木友子、永島良郎、見延誠一、板垣定規、野本節郎、大町欽子、佐々木武巳、鎌田玲子、大西典子、柳沢千代子、松井昌、千葉広、遠藤幸

子、清水朋子、福岡研也・玲子、武沢和義・佐知子、榊川保・弘子、観音礼治郎・芳子、戸津高保・以知子、道川弘・富美子、志田博明・政子、中矢道恵・麻紀、沢田宏子、堀内進、富川徹、新田キノ、佐々木和枝、宮田久、

泉勝統、森田新一郎、竹内強、中川親善、井上公雄 以上42名

〔担当幹事〕 戸津高保、柳沢千代子、井上公雄



〔鶴川〕

平成元年 8月27日(日)

平成元年 9月10日(日)

牧場を抜けて鶴川の河口付近を歩きます。

千漣ではコチドリ、ムナグ

ロ、チョウシャクシギなどのシギ・チドリ仲間が見られるでしょう。またノビタキ・ホオアカなどの草原の鳥も姿を見せます。

午前9時30分 JR鶴川駅前集合

〔野幌森林公園〕

平成元年10月22日(日)

夏鳥が去って冬鳥たちが姿を見せはじめる季節です。ツグミ、カシラダカなどと共にタカ類も割合よく見られます。野幌の森のシンボル、クマガラが見られるといいですね。

午前9時 大沢口駐車場入口集合

〔野幌森林公園を歩きましょう〕

平成元年9月17日(日)、10月1日(日)

午前9時 大沢口駐車場入口集合

何れの探鳥会も余程の悪天候でない限り行ないます。昼食、筆記用具、観察用具、雨具等をご用意下さい。探鳥会のお問合せは 001 551-6321 井上まで。



◆野鳥写真展の開催

バード・ウィークを挟んで、春恒例の野鳥写真展を今年もたくぎん本店地下自動サービスフロアー(平成元年4月27日～5月19日)及び三菱信託

銀行札幌支店(平成元年5月22日～6月2日)を会場に開催致しました。

回を重ねる毎に会員の関心と期待は昂り、今年も多数の応募作品が寄せられ、日頃の活動の充実振りが伺えます。限られた展示スペースの中に納めるべく苦心しながらも、一枚一枚の中に秘められた「ねがい」や労苦に思いを致し展示しました。折角の応募にも拘らず会場の都合等で展示出来ない作品も有りました事をお詫び致します。

尚来年も開催を予定していますので更に良い作品が寄せられます様期待しております。

写真提供者 白川勝雄(アカゲラ) 長山義雄(コブハクチョウ、タンチョウ) 山田良造(クマガラ、ミミカイノブリ) 速水藤二郎(コウノトリ2点) 和久雅男(コサギ、マガン) 佐藤幸典(コホオアカ、コチドリ) 富川徹(ガン) 平井さち子(ワカケホンセイインコ、バンド

リ) 佐藤康雄(アリスイ、コアカゲラ) 松山潤(マガンの乱舞2点) 難波茂雄(ウミウ、ヒメウ) 小堀煌治(オオマシコ、オオソリハシシギ) 柳沢信雄(シノリガモ、ウミアイサ) 柳沢千代子(コアカゲラ、ベニヒワ) 竹内強(ケアシノスリ、エリマキシギ) 渡辺照彦(フクロウ、キレンジャク) 酒井一光(シメ、キレンジャク) 鈴木克司(ノゴマ、ホオジロ) 渡辺俊夫(カリガネ、コヨシキリ) 村野紀雄(フクロウ) 笹浪甲衛(クロツラヘラサギ、コウノトリ) 谷岡隆(オオハクチョウ) 佐藤勇・版画(ヒヨドリ)

◆『野幌』ガイドマップ完成!

「野幌森林公園を守る会」がガイドマップを作成しました。野幌は私たちのメイン探鳥地でもあります、あらためて“野幌の自然”を考えさせられましょう。入手希望の方は下記までご連絡下さい。

野幌森林公園を守る会 事務局 柳沢信雄方

TEL (011) 851-6364

◆お詫びと訂正

75号3頁記載の写真でアメリカコハクチョウとコハクチョウとありましたがアメリカコハクチョウとオオハクチョウの誤りでした。お詫びして訂正致します。

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 1,500円 (会計年度4月より) 郵便振替 小樽 1-18287
☎060 札幌市中央区北3条西11丁目 加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465